

中村俊定文庫  
文庫 18  
475



明和八年正月出版

(石印子文庫存本)

田毎の替

(白雄撰)



序



大塊我を載るにかたちをもてす休むとするに  
 命あり人いのかれし人も足るらぬいのちあらん  
 そをなんそあたに目をけすべし行なわたくしの  
 行あまなくす進むをみちひき<sup>た</sup>くるい<sup>を</sup>葛<sup>が</sup>し  
 道をもては道の人と交る<sup>た</sup>かま<sup>し</sup>とおもふ人は  
 おもへ師<sup>の</sup>傳<sup>は</sup>ひ<sup>を</sup>け<sup>た</sup>ま<sup>り</sup>う<sup>へ</sup>祖<sup>の</sup>翁<sup>の</sup>のすくよが  
 なる教の一すちい<sup>て</sup>て<sup>て</sup>接<sup>ん</sup>おる<sup>と</sup>のちの  
 六月東都の松喬庵に修<sup>お</sup>の<sup>の</sup>辞<sup>を</sup>のこ<sup>し</sup>

信中より、まるごと二百余日千曲川のほとり波  
あつきはつかあまりよなりけ北ハやめたの里鼻古袖か  
独楽菴の春まつあうのやうを定むこハ田毎の  
はつ日にたよりあうはたむつかしけなる朽ちちのさまを  
よそにこ、ろ安かれハえゆるなに銀糧を嘆て  
あさ水すあしたは解をぬくめてあさふさとす邊之の  
中のホしみ雪水の一碗こに富リことし比国は  
春をむかひしはまた杖ひぬ越のこし路道とちし雪の  
きゆるをまち親友十休宮のあるしを伴ひ旅より

序

十百廿六部

旅は赴んとおもふよりそこにたのつかう題をわがち  
一小冊となせしハみもてやうをとり友とちや  
袖より來れる友とちかくさくこをえりせしあはね  
さつのはは田毎の春よしとひけるくつもの数寄に  
すかすれハ訪邦の同門へけるの贈ものハなりぬ  
時ハ辛卯のむつみ月旅黨にたみえし 白尾坊  
うつからはかみしかき毫をとれ



試毫

ほしはあるとの空つらよはつとり  
聲すくもつくる せみたりよたり  
木に復の上園をものして山にりほる日毎の  
日こそあしけ小其こを葉又あしきか  
ゆへ又翁の遺言すをくめし面影象の  
前よまをぬしてくくおまふに山ハ姨捨し  
ところよていつれとよの何めといふへ  
あしやと雪のあしきえよ冷艶し  
回つら秋の夜をねもふ春 正かひぬ  
も川日親友まの雪の まのりね  
白尾坊  
昨鳥

春興

うくひすや 四さかりなる 殿口

歳暮

旅の日数つもりつゝ行とをねし正今夜  
とそなりぬ六羽して詐るぬ園古あさうと  
みたり食をたししむあさうの朗然たる  
より明珠のかたわらふ丹うかきし  
とハそれなごりあるは夜とて世ととも  
ハ聲をまきくあふら一合山一俵  
たれり たいさうな  
月雪や旅寐かきぬてと一ひと夜

わかふ

雪水の跡みみ行けよ若菜摘  
 はるの色といふもの見たり沃わかふ  
 わかな塾やした、かついふと山家  
 雪わかふ跡のあとに足つかけり  
 さらすほと流もありそわかふかな

ハ幡  
 箕山  
 戸倉  
 若菜  
 孤帆  
 松代  
 斗凉  
 雪和

蕨

このくさの真似板浄し 蕨の夜  
 とほくして、暖かましさを竹林の夜  
 おしな手よかいつて更の蕨かな  
 板の向、日籠おかし 蕨 賣

松代  
 蕨  
 車水  
 和  
 一鳥

うくひすのおのけ聲きく 次女裁  
 蕨や柏の古葉うきなりぬ  
 うくひすの石臺近く初音哉  
 蕨や竹の中より 餅が有

上  
 左十  
 旁  
 路  
 其井



葛木 籠を解の出て行根 芹哉 松代 其明

せり 提子 手もと 煙の や日 南水 関月

藪か げへ 鶴の下 たる 根 せり かい 松宇

たつ 踏の あしに かり ます 根 芹哉 宋兩儀 百吉

一つ ね 釣瓶 へ 送ふ 根 芹哉 天代 古々

春風

はる 風や 淀いたくと 上曰 雲帯

ほ かり かに 舟の くる ねり や 春のか せ 松代 斗南

野も 山も 雪に わかれ 梅の花 松代 風絲

梅か 香や 空に 横たふ 缸の色 白末

梅か 香や 琴の 初音も 南向 柏尾 雪浦

梅 へて 栖を 人に とられ けり 上曰 鳥布

梅さ くや 手折に 寄水ハ 枳殻 垣 上曰 林子

長き 日や 櫓の 敷を くり 返し ハ橋 五泉

長き 日や 舟に にも ひとり 鉄休 松代 関古

なが さり 日や 椀子 結し 猫の 綱 松代 其雲

長日



藻に水の入と啼出す 蛙かな  
 藻をひとふみ撓たるかハつ哉  
 雨降日をまちし蛙かな  
 浅川やとほく黒石 蛙の子  
 あつくと強したるかいつ哉

雨殿

蛙

上日

雨石

不中

倭石

砂珪

左簾

畑中に川瀬うきけり行 霞  
 藻るかに空の手際やあさ霞

柴雨

学声

トウラ

ヤウタ

杉代

鳳巾 夕葉の空に風ありいかのほり  
 鳳巾 夕葉の空に風ありいかのほり  
 山かけの里にう中あしいかのほり  
 二階から其尾ひか水ないかのほり  
 飛鳥の何とあもあそいかのほり

鳳巾

矢代

路因

花了

三思

善光寺

振雨

往川

素月

麦部

十行 廿字詰



燕 巾 伽藍 をあたる 朝ほらけ

杉代 丈

玄鳥

蝶 くの 宗丹垣を 啓りけり

柳 渚

四辻にふきつげられし

胡蝶 哉

上白 二芳

あちらから 笠を 馴たるこころ

哉

中村 渚 平

こころ けすま たる 茨垣

松代 蝉 露 芳

柴橋のうへにかならず

古蝶 かな

松代 路 芳

蝶

陽 炎 巾 何處 やらあまき 足袋の裏

別所 星鳥

陽 炎 巾 かけすり 鉢の 捨ところ

土白 麦 因

のけろふ やと 延に なのしを 干あひせ

少平 松 架

陽 炎 巾 かけすり 鉢の 捨ところ

少平 松 架

陽炎

出代 巾 暮行 門にこすまたち

トクウ 雨 足

出 かいり 巾 ほうし 二ほすぬか 枕

中村 路 一

出代

狼も寝るか 野中のおほろ 月

清野 野 月

長橋の長く 靜けし 朧 月

細樹 以 芳

春雨や畑にすつくと鶴一羽  
 うつくしき枝の鳥やはるの雨  
 春雨や鐘うた霞を朝ほけ  
 雪解や野中の杭の二三寸  
 雪とけや嶺のわら尾のほろと  
 雪とけやわつおに之出すおれとの実  
 雪解や流水添たる柏の葉  
 さき(なれの、残)し雪解哉

上田 坐井  
 トウラ 車戸  
 ヤウリ 素洲  
 松代 芦凡  
 ヤウタウ 嘉江  
 上田 朴之  
 争茂  
 葉石

つらくの出て行あとか穉簾  
 長くと塵を唾し 乙鳥哉  
 燕巾拭すむ 鞞にふきこまれ  
 猫の意  
 丑三にまゝ啼やまらん 猫の意  
 静なる夜にすさましやぬこの意  
 はる雨  
 春雨や水に見わたす の泡  
 はる雨 禊けりたる分甚賣

上田 有常  
 上田 三机  
 松代 杜若  
 松代 涼雨  
 上田 茶雨  
 上田 茶雨  
 徳中 和  
 松代



苗代や湖水の端に一かま一  
 なほしろや遙は存水て堰の音  
 あい雪やうけては流す川  
 う春とせめつとれよはるの雪  
 淡雪やたぬれと木もかり  
 よこれーは掃捨させん春の雪  
 蜂の巣や五重の塔にたひとつ

情池 巨英  
 松代 行雨  
 李井  
 松代 巨春  
 柳帆  
 報 雪路  
 上白 茶畑

苗代やニころの鳥おと一  
 存ほしろや杭にひう角大師  
 苗代  
 すみれつあや暮存んとす後堂  
 のう犬の敷上寝追や了董哉  
 わか草やあくくくと土籠  
 若草や表しけりて道祖神  
 わか柳や教化して行古車柳邊

上白 志仙  
 上白 素風  
 松代 花計  
 松代 琴亭  
 松代 文長  
 松代 半古  
 松代 隨和

なの はな や 中 に 真青 な は な れ 山  
 なの 花 や せ い ふ き の 水 も 美 し き  
 菜 の 華 や 垣 か ら 見 越 す 明 屋 敷  
 なの 花 や 牛 の 寝 て 居 る 村 界  
 菜 の 花 や 眠 た き 空 に 鶯 の 聲  
 行 厂 や 跡 に 風 も つ 磯 朝 松  
 松 風 も 海 へ ぬ く 日 が か へ る 厂

鳥の巢

歸 厂

上田 秋 壺  
 清野 赤 水  
 山子川 準 蝶  
 上田 也 蕨  
 長久保 五 竹  
 上田 五 竹  
 上田 五 竹

は ち の 巢 や 松 さ し か さ 軒 端 よ り  
 白  
 し ら 魚 や 足 附 を 越 し ぬ り 手 桶  
 白 魚 や 小 舟 寄 附 た の 夕 さ か び  
 わ か 鮎 や 十 に そ ろ 一 籠 の こ を  
 く こ 鮎 や 行 け り 運 ぶ 舟 の 川  
 右 の たり 岩 に わ か る 小 鮎 が 存

菜の花

ヤリタ 十 砂  
 鳥 奴  
 一 帆  
 上田 芳 沙  
 松代 千 雪  
 曉 羽

炭かまや野鳥しの我をなくさめる 雨竹

武水分社前

わわたの里に年をかきわし比神のめくこ

いと尊くしめつうち人なる左麓土と

ともにいまなる石柱をわたるそれさへ

端出之縄ひきはへてかいつ代のおかーも

たもひやくれ

うらしろや信屋柄も神の春 昨鳥

鳥の巢やいつこの花が 二三輪 杉路代

鳥の巢や白きは尾か糸の肩 上白 風伍

とりの巢や困ひとなりし花の枝 上白 鉄鼠

落し角

あれし 煙の中やたご角 上白 夢二

落し角提へたかしや山法師 少年 玉馬

春の句逢かうれ友とち

ありてこゝに冬雪と出す 松代 巳件

はつ雪やまたもの馴ぬもの塵 松代 巳件

松代 巳件

少年 玉馬

上白 夢二

上白 鉄鼠

上白 風伍

杉路代



人日

としころ 松露庵につかひ居りしかハ  
 かならず 葛飾の菖菫を以て鍋内の  
 かやをまじうせしちも市街のあふこありか  
 霧の煙に替行て其風流薄きハ  
 供たれとものにかこつていと なつかし  
 ことしは やかろへの白妙に杖の道さたか  
 なるやとさうしふ川のさうしと 沃道に  
 おりたしと我ために袂をぬらさんとす  
 折のう 投せしおみの奥に  
 足せばやなこ水信懐の雪あかなと  
 一籠に添て鳥瀬よりおとつ小けは

十行 廿字

No.

大雪のあしたわかなを囉けり

昨鳥

たのつかうなる蒼の木箸

閑古

鶯の顔おも長に啼そめて

箕山

林の中を 駕留て 行

左簾

おもひやう 何某殿の月倦ひ

五泉

うたゝ寝さめて 秋風をわく

素沙

かうくと軒のト浪の乾つゝ

古

こゝ醒井の水わーるえ

鳥

されの結の草鞋を母物 はきよけに

簾

題

目に言かへさるゝ御祈

泉

寝庵配つて行燈引は

鳥

前室のひとへといまは暑くろし

古

子たからをとり人ほろろやむ

山

古いろなく師走の果の雪あつて

麓

了せし路は江戸のたし中

山

あふおのこ放れし馬に手を廣け

一

よく見れは人か聲

一

釣燈籠をいとしのふ夜恥かし

山

剃らぬむかしさるさかろるゝ

山

のそき城に折曲垣のゝかまへ

山

沢深味るせゝなきの中

泉

月涼しと虫のさゝれたり

鳥

こと葉かけしハ誰んたか毒

古

瑟瑟ニのむその人からのもをやさし

山

やよひ中静なりけり

鳥

花白く真子の遠里きしか

路

うしろあはせに曰うち畑打

簾

十行 廿字詰

月は二日のあふへくも存し  
 たて横に水村祭くつれたち  
 後祭をかして 詠 盗ま小  
 警こりこくひなたか又も薄うなり  
 卯はさうく ほとりきす啼  
 おく起に途揮めさる 神 静  
 うしろ 浄のそれとこそ知れ  
 長旅を問わもあろかや花のため  
 遊あそびは 恵み送物ものの春

大 山 泉 鳥 一 雁 河 開 執子

十行 廿字詰

大森のそあふる雨には 襦袢を紋り  
 あく 薔が崎のあさき 風よは 茅蒲を  
 とられつ 骨まてぬう して やろく  
 補陀山の蒲室 念つくる 時 松はらの  
 旧庵に 草鞋をとく まくらを 窓  
 春の夜の夢もえす 一毛 一つ  
 明行 窓に 雨すれハ 一天に 雲を 显す  
 空くたる 江上 鼓ふ  
 わかいた 朝夕 子えり 余は 綾の  
 儀と 母か けりて めつ

おりに 三 土早を つく日

海花集乃亦影のからまる旭哉  
投あしの雲は花の朝日かふ  
もとふねの午水にぬるむあさ日哉

右己丑仲春念七詰乾

鳴く竹菴

多岐心

やつかれしむつふさに行脚一曾我野  
なす徐舟亭にあそぶ折かすかくあいの  
奥よかいつせ移く玉心ふあしの若  
あしくふいよ又めいつせ侍る

十行 廿字詰

春興遅滞

ちうくと杉を枯展にひはり哉  
鴛鴦の隣も起す初音かふ  
凍解やむかしの山のかけほりし  
都はなの袖にとまらぬ椿哉

八幡 九存

上白 竹牙

白 千卷 娥

文通 春季不限

犬啼は明石の岸か小夜衛  
名月やあけてさすなら猿子障子  
之結こく雪をよけて昔かな

江戸 日弁

深魚

岷雪

つく／＼と見てたつ小田の肝雨我  
見て深て又たう出つ 秋の暮  
浅く／＼と水のひとやけわの月  
わかやや飛けハ鶴の放し飼  
静さに融啼なき 霜夜かふ  
木つゝさの猶美しや 冬木たち  
山の井と釣瓶と、やぬ墨かふ  
鶯の啼きこたふて逃にけり  
梅さくやあくたの上には 蚋の聲

徐来 泉之 菊莊 大末 抵雨 巨計 暮原 坐泉 千輝

十七

十行 廿四字話

追出—た嵐遠けり 壁の葛  
明月や文札返さ 鳥の影  
鵲や敷をつくし 梅ひとつ  
明月や放した 魚の透通り  
二三里も先の船 足て 夕す、み  
たけ狩やうには ぼひこる 枝を 見す  
秋たつや 笛を 聞居る 馬の 耳  
ほつ汐や 小松の 中に 月の かげ  
朝顔や 折戸の けは ちちう 向

吳川 江左 眠花 其留 雨和 吾意 菊人 乙河 批意

川せみや碓のかげに羽つくろひ  
 篋作の親父か顔へ落葉かふ  
 木琴へむかへはよ所ハ葎かふ  
 腰かげの石もひまゑ秋のくれ  
 もの干た小枝は何か朧月  
 青柳やけさはとくしさらし杭  
 状箱の音もはけり寒かふ  
 玄鳥や戸さゝめ巾代にけたまし  
 箱毒やあか<sup>3</sup>夜は月の入ところ

徐舟 花 古 竟 毒 一 毒 行 大 虚 莫 青 菱 湖 天

白雉のしうさかうへに霞かな  
 明月やよし帰るも竹のうへ  
 川せみや居るほと居小ハあきたつ  
 蝙蝠や暮し思木の鳥居より  
 水茶屋へはき寄て置く落葉哉  
 長きりや寸三切音のはてしなき  
 風月を糸にとめて鳳巾

十八

我花 書 稿 花 手 魚 生 文 卿 柳 几 下籠 弄 船 鳥 朝 眉 鬼 石 尺

はる雨や歩み行野に土竜  
 螢入て猶もすまさん春の水  
 あ（風か）の雲にニりかーりてはつ時雨  
 登り得し坂を 桂皮や啼ひけり  
 かれ芦の音にき交て千鳥かふ  
 鶏尻や夕日に揃ふかやほろし  
 花 積 落てくろふもなし  
 初雪や一山つゝに 蛸の壳  
 ことく 名のなき木もおほる月

和橋

鳥 春 塘 梅 明 斗 城 松 救 鬼 明 鶏 父 春 江

いさ宵や目覚の森にあふうろ  
 雪のゆわさくりと 磯傳ひ  
 稲妻や白うこほる一草の露  
 雪解やのほりつありつ伽藍石  
 春の雨隣の道途之はやさん  
 はつ厂や雨にはまたぬ 朝ほろけ  
 鳥を月や隣と垣ひとへ  
 長閑さや血駕釣ら月真昼中  
 葉の 蔓も垣もけり小けりたね瓢

上徳

雨 林 去 梅 木 女 上 嶮 他 行 有 隣 梅 止 夜 松 露 町

十九

十行 廿四字詠





梅の花菜の名ところに咲にけり  
 松の 乞食の家の時雨哉  
 水の 了鳥に暮るあほろ月  
 いす ~~松~~ 摘む花の七種ほしのため  
 たま ~~く~~ に虫死残る松野あふ  
 けつ 雪や屋上の杪に一つのみ

鶯や竹の折れしハきのおけふ  
 はつ時雨青き松葉七散にけり  
 石櫛のあしろ寄けり梅の花  
 蘭の香や出さへ棲す夜もすかろ  
 つき ~~捨~~ 捨て松明燃るこぼりかふ  
 箱妻や狐の走る亀のささ  
 高や何と喰すに声高し  
 静さは夜の行明の露かふ

二十一  
 十行 廿四字

信を通ることかた輪車のおあへくしあらず、こと  
 ハ、とことし信中に白尾房をと、め得し月門同景をな  
 らへあ、筆をたうす、坊ハ又日毎のほつ日に面して浮  
 遊のほるをとりたりと啼く一日ハ幡の傍居を伺小にこ  
 、に墨せよと楮皮の白すを残しあたふ、田ことの日にこ  
 そとありし祖翁のこと葉を一巻にこめしものよはた鳥  
 先師のおくられし朝日の三亭あかしの春なつわハ  
 なみれこほれ侍了序せられしこと千里の風食露宿を  
 ともしにせむと確的せし我なれはつたなすを恥てつ、み  
 還へくもあらねと酒のちがらにあらすれは筆とる

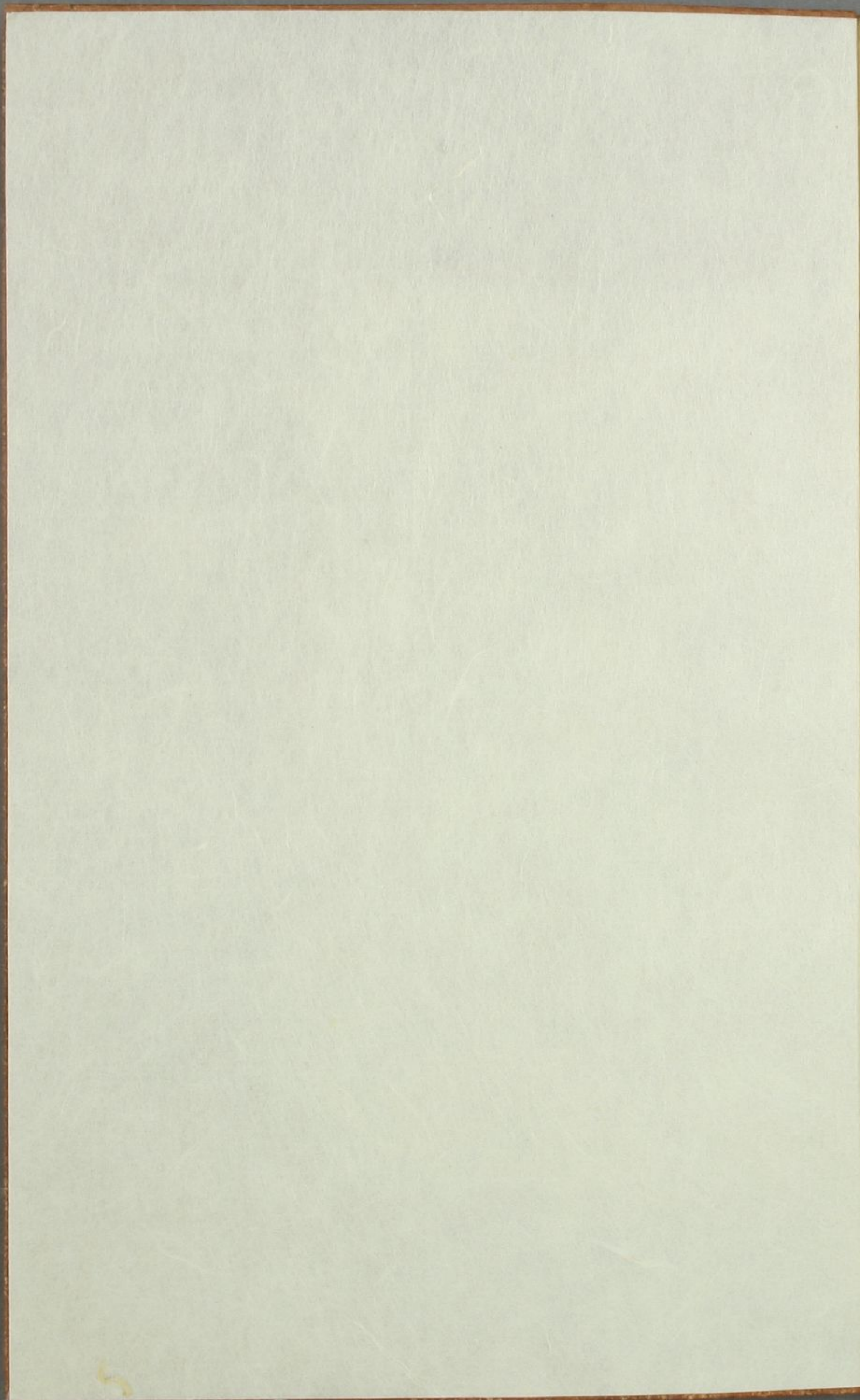
十行 正四字話

あたはす 坊酒よきものこにくむ事なかれ、酔して毫  
 の未わかすともと者核すはなきにまかせ一盃一はい又一  
 盃もみしかかかぬこ、地して口に味ひ硯にしたみやか  
 て十廿窓のあるし後題をまねお倒ふすともな人そ傍人  
 の事に興んや



彫工 信中上田常田町 井筒屋 万七

二十三尾



十行 廿四字高

